

JICA ボランティア 千葉

SV ニュース
第 16号

平成二十三年秋公開講演会と定例会を開催
JICA国内事業部長 新納 宏氏による「日本も元気にする国際協力事業」と、千葉市国際交流協会常務理事 泉水佐百合氏、同職員の中西 慧理果氏による「多文化共生社会の実現」と題する講演が行われました。

公開講演会が十一月三日（土）千葉市国際交流プラザで開催されました。

講師の新納 宏氏はJICA在籍二十七年で、この期間中の中央アジアやJICA四国等で携わった開発途上国支援の形であった援助変遷を紹介し、三月十一日以降、ODAの役割と課題の変化を感じられると説かれました。東日本大震災に際して、海外からの支援は途上国から我が国に対するものもあり、援助国、被援助国の上下関係が消失し、持ちつ持たれつの状況に変化している。少子高齢化など、日本と途上国に共通する問題の浮上などによって、「途上国を



新納講師

「途上国を



泉水講師（中央）、中西講師（右）

元気にする」ことは「日本も元気にする」ことにつながると指摘し、さらなる国際協力の重要性を強調されました。

泉水佐百合氏と中西慧理果氏からは千葉市における外国人住民の背景と現状、外国人の増大と地域における内なる国際化進展状況の紹介をされ、これに対処する国際交流協会の活動を紹介されました。

四月からは多文化共生マスタープランを実行しており、事業実施のための財源確保の努力と行政や学校などへの協力をよびかけつつあると話されました。

平成二十四年度通常総会日程
日時 五月十九日（土）
十三時～十六時
引続き懇親会を予定
会場 浦安市国際センター

た。

また、外国人は言葉の不自由さに起因して災害弱者になる可能性が大きい。現在は実務的に東北の震災被災外国人に対して、コミュニケーションの手助けをする必要性が極めて大きいと強調されました。

公開講演会終了後、当会平成二十三年度定例会が開催されました。山本会長挨拶に引き続き、来賓のJICA地球ひろば地域連携課長 長谷川 敏久氏よりご挨拶があり、JICAの市民参加活動に対する更なる支援要請がありました。



西織氏挨拶

引き続き千葉県国際課主幹 西織 哲大氏よりご挨拶を頂き、震災後、世界から多くの援助が有る外国との繋がりを実感した、これは県の国際交流活動の成果であると話されました。

散会後近隣の「美弥和」にて懇親会が開かれ、活発な相互の情報交換と意見交換が行われました。



千葉県民の皆様、千葉県JICAシニアボランティアの会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか？ 先

の大震災で被災された方もいらっしゃるかも知れませんが、ここにお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心から願っています。

さて、私は昨年十月に青年海外協力隊事務局局長を拝命して四ヶ月が経ちますが、その間に「秋募集」を経験しまし

た。若者の内向き志向が強くなった結果でしょうか、青年海外協力隊への応募者が減少していま

す。また、人口増加著しいシニアの方の応募も減少しており、シニア世代も内向き志向が蔓延している証かもしれません。

若者もシニアも内向き志向だとすれば、更に進むであろうグローバル化の世の中で我が国は大丈夫だろうか、と心配の念を抱くのは小学生だけでしょ

うか？

東日本大震災の復旧・復興には、非常に多くの方々ボランティア活動に参加されました。また、今でも多くの方々被災地に入って献身的な活動を続けられています。我が国では、阪神淡路大震災、そして今般の東日本大震災を経て、確実に「ボランティア」が根付いたように思います。それなのに海外でのボランティア活動を志向する人が減少しているのは何故なの

世界も日本も元気にする JICAボランティア

JICA青年海外協力隊
事務局長 武下 悌治氏

か？

三・一一以降、百六十以上の国々から義援金、援助隊や応援メッセージが寄せられました。また、あらゆる国際機関からも援助の手が差し伸べられました。

その結果、我が国は世界一の被援助国になりました。戦後の我が国の著しい経済成長が国際機関からの援助によって支えられたことを考えても、開発途上国に対する協力を継続することは重要で、結局は我が国のためであると考えます。

つまり、援助や協力は、先進国から途上国への一方的なものではなく、双方向に作用するものなのです。政治・経済の関係強化においても、まずはお互いの信頼関係が前提条件であることを我々は知っており、JICAボランティアの継続的な活動がその一翼を担っていると言っても過言ではありません。

是非とも内向き志向を打破しないと、途上国の求める発展の速度が遅くなり、また、我が国の将来が暗くなってしまう。その意味で、シニア海外ボランティアを経験された皆様のご活躍が貴重だと思っています。「国際理解教育」「開発教育」等を通じて、世界の中の日本を正しく伝え、国際協力の意義を広く伝えることが大切なので、引き続き皆さんのご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

公開講演会講演要旨

「日本も元気にする
国際協力事業」

独立行政法人 国際協力機構
国内事業部長 新納 宏氏



私はJICAに在籍して二十七年、この間にモンゴルをはじめとする中央アジアや、香川県

高松市にあるJICA四国に勤務し、地域ごとに異なる人々の暮らしや考え方の違いを深く認識することになった。

従来、JICAは途上国支援のための存在であると人々はみているが、国内に対するJICAの貢献といった側面の重要性も、本日は強調したい。

その例は今回の東日本大震災に際して、途上国をも含めた海外各国から多くの支援を受けたことである。

わが国が受けた海外からの義援金、支援金は百四十三カ国、七百六十億円にものぼり、現在、スーダンが受けている緊急援助額やガーナが受けているODA総額などをはるかに凌駕し、さらにJICAに届いたメッセージも三千件を超えている。海外のJICA事務所は援助を供給するためのものから、援助を受けるための窓口ともなっている。

かつてのODAは豊かな先進国が途上国の開発を支援するための手段であったが、近年では

ブラジル、インドなどの新興国も開発援助に乗り出しており、ODAは元来の意味合いをしだいに変容しつつある。こうした傾向は一九九〇年以降、世界の構造が急速にグローバル化したことと無縁ではなからう。

国際協力、開発援助という側面についてのグローバル化とは、換言すれば、援助国と被援助国との区別や垣根がなくなりつつあると言うことであろう。

今回の震災に対する途上国からの支援は、こうした傾向を如実に示したのともいえる。このように、途上国を元気にすること」は「日本も元気にすること」につながるという「内外一体化」の現実、国民の皆様にもっと注目して頂きたい。

ODAの性格の政策的とでも言える近年の変容は、わが国をも含めた各国政府にとってその予算確保の理由づけに苦しむところともなっているが、わが国ではこの内外一体化の側面をよく示すことがODAの理由づけのひとつともなろう。

日本も元気にする国際協力事業、すなわち、途上国への援助が国益にも反映し得る事業としては、①途上国の人々を対象として国内各拠点で実施するJICA研修。これは国内各地域と途上国との間での人材ネットワークの構築や、相互の情報交換と収集に有益である。②草の根技術協力による途上国での課題解決経験を、帰国後、日本の地域へ還元。③青年海外協力隊員、シニア海外ボランティアなどの海外経験を、帰国後、わが

国の人々へ還元、および④JICA事業をとおして地方自治体等の国際化に貢献、などである。こうした側面でも、引き続き、JICAへの支援をお願いしたい。

「多文化共生社会の実現」

財団法人千葉市国際交流協会
常務理事兼事務局長 泉水 佐百合氏
国際交流員 中西 慧理果氏

千葉市国際交流協会の活動について
(泉水 佐百合氏)

「多文化共生社会の実現」を目指し、国際交流協会が行っている事業などについて私が話し、

国際交流員の中西さんがボランティア活動の重要性を述べる。

千葉市国際交流協会は平成六年の七月に設立された。設立当時、千葉市の外国人登録者数は、約一万人で千葉市人口の八十五人に一人の割合であったが、現在は二倍超の約二万二千人と四十三人に一人の割合となってきた。

国別では、中国が全体の四十七割で、韓国二十割、フィリピン十一割、ブラジル、タイと続き、中国は平成六年比、四倍超の伸びで際立っている。

外国人の増加とともに、国際結婚も増え、生まれた子どもは、親の文化的背景を併せ持

つ。日本国籍取得者も、外国人住民と同様の課題を抱える場合が多く、多言語・異文化を持つ人が増え、地域で生活するという「定住化」が進む傾向にあるのが現状である。

従い、地域社会では多文化共生が求められ、外国人住民も地域に参加を促進して、日本人住民と協調関係を築くことが不可欠となってきた。

日本語がよくわからず、文化・生活習慣が違う外国人市民が、地域社会で日常生活を送るうえで、様々な障害となることもある。

住居地では生活ルールを巡って外国人住民と日本人住民との間でトラブルが発生することも予想され、お互いのコミュニケーションを図るためにも、最低限の日本語力が必要となる。

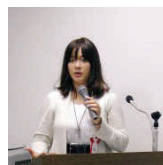
千葉市国際交流協会では、日本語学習を中心とした、外国人市民支援、活動していただいているボランティアの登録・育成、相談窓口の開設、地域での異文化理解の推進及び外国人市民が日常生活に必要な情報を多言語により提供するなど様々な事業を行っているが、この度、外国人市民と日本人市民が互いの文化や習慣を認め合いながら共存する多文化共生社会の実現を目指し「多文化共生マスタープラン」を策定した。

外国人市民の増加と定住化に伴い、多文化共生を進めていくためには、多文化共生の理解を深めることが重要であり、日本人市民と外国人市民が、異なる生活習慣や文化、価値観を認め

合い、様々な交流会などに共に参加し意見交換や交流を図るとともに、外国人市民が地域社会の構成員として自立した生活を送ることができるよう、多文化共生社会の実現を目指し事業を進めたい。

災害時の多文化共生社会の
ボランティアの役割

(中西 スタニス 慧理果氏)



災害が発生した時、社会の「常識」は大いに崩れる。外国人住民の多くはそんな混乱した状況の中でさらに言語の壁などの問題に直面し、行動に困る。不足する物資や相反する情報、そして立て続けに襲いかかる災害、これらは今年の三月、日本に住む外国人をとても耐えがたい環境に置いてきた。

日本在住の外国人は言葉の不自由さに起因して災害弱者になる可能性が大きい。言葉の壁のためにコミュニケーション内での繋がりは薄く、それゆえに多くの情報が理解出来ないままに不便を託つこととなる。

コミュニケーションの援助と適切な情報提供はJICAボランティア経験者が担える役割ではないだろうか。

現在でも東日本大震災による被災外国人に対するコミュニケーション支援の必要性はきわめて大きいと考えている。

第十二回帰国報告会開催

二月二十二日(水)、千葉県 JICAシニアボランティア帰国報告会が開催されました。

梅花の候は二月二十二日(水)、午後一時半から約三時間、に亘って第十二回帰国報告会がアミューゼ柏において開催されました。

当日は来賓として地元の柏市地域づくり推進部の高橋直資課長、および柏市国際交流協会の小菅あけみ副会長を迎え、JICA本部からは青年海外協力隊事務局の北野一人次長が参加しました。参加者は地元柏市側とJICAから合わせて五名、会員二十一名、一般聴講者は三十名でした。

会は田村美由紀 JICA 国際協力推進員の司会で始まり、来賓二氏と山本茂穂当会会長の挨拶のあと四名の帰国者が順次、報告講演を行いました。



左から 武藤、高橋、浦木、弓 の各氏

今回の報告者はペルー派遣、

柏市在住の武藤達雄氏、パラオ派遣、船橋市在住の高橋吉男氏、エクアドル派遣、浦安市在住の弓貞子氏、およびメキシコ派遣、市原市在住の浦木仁氏です。

四氏は活動成果の外に多数のスライドを用いて現地の風土や人々の生活ぶりも紹介、報告後多くの質問もとびだし、参加者全員、興味深く聴講しました。

武藤達雄氏は電子工学を専門とし、2009年9月からペルー共和国アレキッパにある工業関係職業訓練機構に赴任しました。ここで、マイクロプロセッサ教材のリニューアルと活性化、およびプロセス制御教材の充実化の二点を目標に、時間厳守、好奇心を持って行動、などをモットーとして活動を行いました。カウンターパートや先生方との緊密なコミュニケーションを心がけたこともあって、満足のいく成果があげられたそうです。

高橋吉男氏も同じく2009年9月から、パラオのコロールにあるパラオ・コミュニティカレッジで家畜飼育、とくに養豚と養鶏を指導してきました。パラオは日本とほぼ同程度の南半球にあり、人口二万人、面積四八八平方キロの極小国です。人々の日常生活における豚や鶏との関わり合いは日本人よりもはるかに深く、獣医である氏はその文化にも教えられることが

多かったそうです。

弓貞子氏は2009年3月にエクアドル、グアランダ市のポリバル国立大学健康科学学部・看護学科に看護師として赴任しました。大学内外での教育活動やコミュニティに対する健康・生活改善プロジェクトに参加、また、地域の医療部会をおしでの健康教育なども行い、多忙であったが充実した二年間であったと報告しました。



熱のこもった報告と聞き入る聴講者

最後の報告者、浦木仁氏は、2009年11月、メキシコ南部、ケレタロ市のケレタロ工科大学で日本式生産管理、特にその実践部分を教えるために赴任しました。大学からの組織的、全面的な協力のおかげで、大中小零細企業七社の改善指導と実践教育を行うことができました。活動はほぼ当初の予定通りに進捗し、満足のゆく成果が得られたことを報告しました。会では及川淳一当会副会長の挨拶で終わり、その後、二十名参加の懇親会が開催されました。

出前講座実施報告

千葉大学教育学部連携授業

例年通り、昨年十月から本年一月までの四日間、計十コマにわたっての授業が行われました。

最早恒例ともなった千葉大学吉田雅巳教室との連携授業では、当会会員五名による集中講義が実施され、学生数は四、五名と少数ながら、全員熱心に聴講しました。

十月二十六日(水)は山本茂穂会員による「日本のODAについて」、十一月二十七日(日)は寺田博義、酒井國彦両会員による「タイでのボランティア生活で得たもの」、および「生涯学習・技術移転の事例から」と題して、それぞれ講義が行われました。続いて十二月四日(日)には白鳥貞夫会員による「バヌアツ共和国におけるビジネス研修事業の課題」、および大西輝明会員による「若者の環境意識と環境教育効果・ヨルダンとコスタリカの例」が講義され、さらに本年一月十八日(水)には山本茂穂、および横田勝徳両会員の担当によるラウンドテーブル「連携授業整理、受講学生の意見聴取」が四名の受講学生にたいして行われ、吉田教授の出席のもと、当該講座のまとめを行いました。

初日の山本会員は国際協力の歴史と実績、主要援助国間でのODA実績の推移比較、開発援助を取り巻く国際動向、貧困と

紛争のリンク、国際理解教育、JICA海外シニアボランティアの現状と実績などについて講義しました。

第二日目の寺田会員は二度にわたるタイでのボランティア経験をもとに、派遣先大学での学生や職員との交流、タイ言語の特徴、タイ料理に代表される食生活や人々の日常生活、ギブアンドテイクよりも相互利益精神を重視する社会の特殊性などを説明し、一般に、異なる社会を理解するには宗教の正しい理解と認識が大切であることを指摘しました。

酒井会員は現地を紹介するスライドと詳細な関連資料により、チュニジアにおける印刷業務の実情と技術移転や体質改善にどのように取り組んでいたかなど、示唆に富んだ講義を行いました。

第三日目の白鳥会員は、バヌアツはメラネシア系の人々が人口の九十三割を占め、その社会は日本の縄文時代を思わせる生活であること、日本の民話に似た話があることなど、興味深い



締め括りのラウンドテーブル



講演する河田会員

月十六日(金)、市原市五井公民館にて、河田眞智子会員による「ネパールでの幼児教育・JICAシニアボランティア体験」と題する講演が行われ、六十名を超える市原市の子育てボランティアが聴講しました。

当講演は途上国での幼児教育の特殊性や困難さ、そうした中

市原市五井公民館

昨年九月

バヌアツ社会をスライドで紹介し、こうした社会でビジネス入門、経営管理概論などの研修テキストを作成した苦心談を語りました。

大西会員は環境意識や教育効果は文化の違いによってどう変わるかをテーマに、コストリカとヨルダン、および日本の大学生に行った意識調査結果を紹介しました。

途上国での若者は特定の事柄に対してはそろった意識を持つ傾向があるが、それは社会にねざす文化の違いと密接に関わっていることを説明しました。



講演する小久保会員

この講演は千葉市内の英語塾教師が課外授業の一環として本会に依頼したものであり、生徒たちに「外国の同世代の子供たちの日常生活を知り、グローバルなビジョンを持つてもらおう」ことを目的に行われたものです。

中学生英語学習グループ

昨年十二月十八日(日)午後七時から約二時間にわたり、千葉市鎌取コミュニティセンターにおいて、英語学習塾に在籍する中学一、二年生とその父兄十五名を対象に、小久保亮一会員夫妻が、氏の派遣国であったヨルダンの人々の暮らしや社会の実情、宗教と生活環境などについて講演しました。

での人々との交流やボランティア活動の喜びなどについての体験談と苦労話であり、子育てに関わる聴講者からは、おおいに参考になり、啓発されたとの感想が寄せられました。

八街市中央公民館

昨年十二月二十一日(水)、八街市中央公民館にて酒井國彦会員夫妻が「チュニジアに於ける技術移転」と題して講演を行いました。



講演する酒井会員

柏市立柏第三小学校

随伴の夫人は、赴任中五〇人もの人々を自宅に招待したこと、海外赴任で益々夫婦仲が良くなったなどのエピソードをかたり、落ち着いた現地の家庭生活が赴任を成功に導く重要ポイントであると指摘しました。

一月二十六日(木)午後、柏市立柏第三小学校体育館において、六年生四クラス約百四十名を対象に、「ラテンアメリカの人々の暮らしと日系人」と題する講演が、及川淳一会員によって行われました。

本講演は昨年九月の柏市立大津ヶ丘第二小学校での講演授業に続く第二弾として、柏市協働推進課の学校訪問事業の一環として実施されたものです。



講演中の加藤会員

二月一日(水)、午前十時から一時間半にわたり、加藤哲男会員による「世界に目を向けよう・ペルー」と題する講演が行われました。当講演は昨年末の酒井会員による講演と同企画の「生きがい短期大学」の一環とし

八街市中央公民館

及川会員は日本の国際協力の現状、ラテンアメリカの地史、同地の日系人の役割などを講演し、後日、児童から百篇を越す感想文が寄せられました。



講演中の及川会員

フェスティバルに参加

KIRAまつり

昨年十月一日(土)午後一時から三時三十分まで、柏市立第一小学校体育館で開催された柏市国際交流協会主催のKIRAまつりに参加しました。

当会からは黒田昭太郎、羽田亨、中村時夫の各会員がアテンド、武藤達雄会員が参加しました。



説明中の羽田会員(左)と中村会員(右)

活動パネル、当会概要、SVニュース、出前講座資料、JICA各種資料、シニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊

て行われたもので、五十〜七十歳の二十八名が聴講しました。

加藤会員はシニア海外ボランティアとして派遣されたポリビア、シリア、インドネシアの体験をも織り込みながら、公民館が要望したペルーでの生活や社会の実情などを紹介しました。

募集要項を展示するとともに、応募についての相談を行いました。

応募の相談者は四名あり十月三日のAMミューゼ柏でのJICAシニア海外ボランティア「体験談&説明会」の案内を行いました。

千葉県庁展望室パネル展示

昨年に続き当会とJICA千葉デスクが共同で、平成二十三年十月中、千葉県庁十九階の展望室壁面にJICAシニアボランティア活動および青年海外協力隊の活動写真パネルを展示し、訪れた人々の国際理解にアピールしました。



活動パネル展示

四街道市民文化祭

平成二十三年度も「文化の日」を中心に開催される四街道市民文化祭に参加しました。

十一月三日（木・文化の日）のオープニングセレモニーではそれぞれの会が自作の幟を持っ

てステージに上がり会のPRをしました。



オープニングセレモニー
当会の自作幟旗は右から4番目

放送大学千葉学習センター 第三回秋祭り

昨年十月一日（土）十二時から四時まで、放送大学千葉



講演中の河田会員

学習センター八階会議室にて当会ブースを初めて開設しました。斎藤富貴子会員が主宰する中南米文化研究会に協賛したもので、当会パネル展示、JICAボランティア資料の配布と応募相談を行いました。同十月二日（日）午前十時から十二時に河田眞智子講師による「ネパールの幼児教育」と題して出前講座を行いました。午後は三時までブース展示、応募相談を継続しました。

国際フェスタCHIBA

千葉大学キャンパスで十二月十一日（日）、（財）ちば国際コンベンションビュロー、JICA地球ひろば、千葉県ユニセフ協会、REK（麗澤大学、江戸川大学、神田外国語大学）の主催で開催されました。

当会もJICAと共にブースを設け、活動紹介展示、ボランティア応募相談を行いました。



会場風景

ステージアトラクションは、酒井美紀氏のトークショーや国際協力成果発表が行われました。



パネリストの右より影山 洵会員、
青年海外協力隊OBの青山 将氏、
青山真弓氏

JICAによるパネルトーク「JICAボランティアと選抜・背景も、自分も、変えるシゴト」は影山 洵会員が参加し、麗澤大学成瀬教授の軽妙な司会で行われました。引き続きステージアトラクションで盛り上げました。

三階レセプションホールでは、ユニセフの集いが行われ、モルディブ大使や後藤健二氏の講演が行われました。

生協食堂などでは二十二の団体が活動紹介を行い、千葉県の国際協力への取り組みの姿勢を示す力の入ったイベント内容となりました。

ボランティアシンポジウム

十二月十六日（金）十一時～十五時千葉県教育会館大ホールにて千葉県環境生活部主催で“千葉県を元気に”と題しボランティアシンポジウムが行われました。

基調講演としてKーファイトアの須藤元気氏によるWe are



シンポジウム風景

All Oneすべてはひとつがあり、「助ける事は、助けられること」でボランティアも自分も楽しくなければ続かないの思いを述べられました。県内の五氏によるシンポジウムも行われ、ボランティア体験を中心に考え方や思いを話されました。平日にもかかわらず、約二〇〇名の参加者がありました。当会は相談コーナーにてSVニュース、会の概要、JICA資料等を配布し概要の説明や海外ボランティアを志向する相談に対応しました。

田村美由紀 JICA千葉デスク、津田正臣、横田勝徳の各会員が参加しました。

本年も引き続き本イベントが開催される予定です。

ちば市国際ふれあい フェスティバル2012

千葉市の「きぼーる」にて平成二十四年二月十九日（日）、千葉国際フェスティバル実行委員会主催、千葉市、千葉市教

育委員会、JICAおよび(財)自治体国際化協会の後援により、「キラッとちばの国際交流、がんばろう、日本」のキャッチフレーズで開催されました。当会を含む三十三団体が参加しました。

肌寒い季節にもかかわらず、多くの来場者があり、国際色豊かな料理や物品が販売されたり、ステージでは楽器演奏、コーラス、ベリーダンス等が行われ、フェスティバルを盛り上げました。

当会は二階にブースを設け、活動パネル展示、シニア海外ボランティア応募相談と国際理解クイズを行いました。



当会ブース

国際理解クイズには約百名の来場者が挑戦し、対応に追われました。ボランティア応募相談コーナーでは日本語教師をめざす相談者等に、応募の仕方や要望されている経験などについてアドバイスを行い、資料を提供しました。用意した資料の殆どが底をつく盛況でした。

会員動静

(敬称略)

○会員数 (平成二十四年二月二十九日現在) 九十九名

○会員異動 (平成二十三年八月十一日以降)

入会者 二名
退会者 なし

○再派遣帰国者 (平成二十三年八月十一日以降)

高木 利公 タイ

コンピュター技術 館山市

武藤 達雄 ペルー

コンピュター技術 柏市

大澤 トシエ シリア

服飾デザイン 松戸市

渡辺 章 ミクロネシア

保健師 松戸市

寺島 得司 エルサルバドル

上下水道 八千代市

吉原 久雄 トンガ

農業生産技術 印西市

堀 甲子男 チュニジア

柔道 千葉市

○再派遣中の方々 (平成二十四年二月二十九日現在)

児玉 東洋 ドミニカ

工業排水処理 千葉市

大久保 邦衛 フィジー

水産物流通改善 浦安市

濱崎 丘 ベリーズ

廃棄物処理 柏市

小松 秀世 エチオピア

給水施設計画 山武郡

○入会者

高橋 吉男 パラオ

家畜飼育 船橋市

(十一月十八日付)

浦木 仁 メキシコ

生産管理 市原市

(十二月二十九日付)

会員 寄稿

ホンジュラスのボランティア

活動を振り返って

(算数指導力の向上を目指して)

柴崎 静江 ホンジュラス
算数指導 船橋市



二〇〇九年米国大統領選に勝利したオバマ大統領に刺激されチェンジの年にあたりたいと

定年を前にして退職した。

若くはないのだから、言葉の

壁、気候風土、生活習慣の異なる国にわざわざ行かなくても等

周囲の心配をよそにボランティア活動に挑戦。

任国では、JICA「算数指導力向上プロジェクト」のフェーズⅠで小学校教師用指導書及び児童用作業帳を作成配布。

しかし指導書の活用が不十分であり指導力の強化とフェーズⅡ(二〇〇三〜二〇一〇)で大卒課程の教員プログラムの技術支援を行っていた。そのフェーズⅡの終盤二年間に関わり活動することになった。

任国は中南米の小さな国ホンジュラス。首都テグシガルパの国立教育大学に籍を置き、同敷地内にある付属小学校において授業観察を通じて授業の問題点を探ると共に、先生方の指導力の向上、授業研究の実施を支援

する活動を開始する。



円の面積よ！

任地に到着三日後にクーデターが起こり、外出禁止令が出、テレビ放映のストップなどで情報が途絶え、活動や食料の調達、住居探し等、思うように行かず前途多難なスタートとなった。

これを貴重な体験と前向きに受け取り、今ある現状の中でできることから始めた。朝の七時には授業が始まり五〇分授業七コマ展開というハードスケジュール。人々は、朝早く仕事が始まるが夕方四時半ごろには仕事を終え帰宅し家族と共に過ごしている。

家族や知人をこよなく愛し絆を大切にしている。ラテン気質で時間に対するおろかさから、時間通りに会議を始めることや事前の準備をすることはなく、会場の変更等のロスタイムも生じ計画的に物事を実行していくことは難しかった。

研修会を実施し、事前の準備や時間厳守に心がけて具体的にやってみせて、意識の改革をしいった。

十二の教員養成校、国立教育大学二校合同の研修会、地元の小学校の先生方の研修会、地方の研修会の実施の支援など活動が広がった。教育を担う人々との教育談義や情報交換はプロジェクトの終盤でもあり充実していた。先人たちの努力の賜物である。

目標達成のため連携する活動も着々と進み、テレビ授業研究十回の模擬授業を放映することができた。地区の研修会も一校から二校、合同四校合同と規模も広がり、定期的に開催される様になった。

雨季で土砂降りの雨の中、土曜日の休日にもかかわらず沢山の先生方の参加を得た。いい授業したいという先生方の向上心に深く感動した。中学の先生向けの研修会も土曜日の休日に大学で開催することも始まりスタートに中学の先生も加わり前途有望である。



九九カード出来たよ

また、手作りした教具を国際シンポジウム会場や中南米の広域研修会等で展示紹介、更に新聞や雑誌に掲載をする機会に

も恵まれた。
 たくさんの人々との繋がり、
 長年培った指導技術の共有化が
 図れたことは夢のようであっ
 た。「解った！教えて！」と
 もの声「授業どうだった？」と
 先生方の声、自分が必要とされ
 ていることに喜びを感じての二
 年間の活動であった。



先生解った！ 算数大好き

一人では何もできないがみんな
 なで支え合い互いに生長するこ
 とができた喜びを体験できたこ
 とに感謝している。現在、在日
 外国人に日本語を教えるボラン
 ティア活動を楽しんでいる。

シニアボランティアの十年 ライジー、フータン、カンボジア

鈴木 晶 千葉ボジア
 都市計画 千葉市



三十八年に
 及ぶ一般企業
 での勤務を経
 てJICAシ
 ニア海外ボラ
 ンティアのプ
 ログラムに参

加する機会を得て、三カ国・延
 べ六年半に亘る現地駐在を終
 え、二〇一一年一月最後の任地
 であったカンボジアから帰国し
 ました。準備期間・訓練期間等
 を加えると十年間に及ぶボラン
 ティア活動でした。

ボランティア活動に参加する
 動機となったのは、考えてみる
 と、二十五年程前に業務出張
 中だったフィリピンのレストラ
 ンで会った一人の青年海外協力
 隊メンバーだったような気がし
 て居ります。

当時、三十代半ばだった私
 と、それ程年の離れていなかった
 であろう彼は、農業指導でレ
 イテ島か何処かの島に駐在して
 いて、主に稲の栽培指導をして
 いたらしく、稲作やカウンター
 パートとの共同作業等を熱い口
 調で話していました。

日本人は二人しか居ないレス
 トランで、単身で現地農民と共
 に活動する一青年の話に感動
 し、心の片隅にボランティア活
 動に対する興味が芽生えて行っ
 たようです。



打合せ風景



仮校舎での開校式の様子

その後、本来業務に追われ、
 そんな経験を思い出す事はある
 ませんでした。が、定年を迎え、
 ふと振り返った時、何故かあの
 時の感動を思い出し、幸い、シ
 ニア海外ボランティアの制度が
 ある事を知り早速応募した次第
 です。

最初の任地は南太平洋に浮かぶ
 島国・フィジー、二番目はヒマ
 ラヤ山麓東端にあるブータン、
 三番目はメコン河中流に位置す
 る平らな国のカンボジアです。

指導科目は都市計画や建築施
 工と言った現地に密着した分野
 でした。

フィジーの首都スバでは、自
 然発生的に発展した街を計画的
 に整備するマスタープラン見直
 しと並行して、古いマーケット
 やバスターミナルの動線整理に
 始まり、街中・海岸沿いに遊歩
 道を整備する等、即、実現可能
 な案の実現にも注力しました。

スバ半島南端海岸沿いに作っ
 た市民憩いの大型公園は「P
 kashī Suzuki Garden」と名付け

られ、JICA機関紙のクロス
 ロード・二〇〇六年七月号にも
 紹介されています。

ブータンでは二〇〇二年に設
 立された王立ブータン大学に派
 遣され、各キャンパスのマス
 タープラン作成と並行して、本
 部事務局の建設工事を完了させ
 ました。担当職員への技術移転
 はOJTで行われました。

カンボジアでの任地・シムリ
 アップは世界遺産・アンコール
 ワット遺跡群に隣接する観光地
 であり、市街の美化活動を進め
 ました。

案内板の整備や市街の中心を
 流れるシムリアップ川に、伝統
 的な建築様式の屋根を持つ歩道
 橋の架設、延べ十歳にも及ぶ河
 岸緑地と歩道を分ける柵の設
 置、五〇〇本を超える街路樹苗
 木の植樹を終え、十年後の街の
 風景の変化を楽しみにしていま
 す。

シリアの食品品質管理

加藤 哲男 シリア
 食品分析と排水処理 流山市



応募の動機は
 定年後有意義な
 人生を送るた
 め、長年蓄えた
 知識技術が活か
 せる方法に合致
 したことである。

派遣の目的は途上国では最新
 機械、技術などを導入し、先進
 国に追いつくこととするが、基礎
 が無い加減な教育を行って
 いることが多い、そのことを検

討し改善するためであった。
 シリアのホムス市にある職業
 訓練校における活動は、高校卒
 業生を対象とした職業訓練の為
 に設けられた。

技術程度は初級で先生の技量
 も低い。そこで、食品分析技術
 を指導しようと意気込んだが、
 以下の如く満足とは言えない。

授業は実験室での演習で一コ
 マ二時間。技術的な間違いを見
 つけ、正しい方法に改善しよう
 としたが、うまく行かなかった。



ムハンマド先生と生徒達

私は一方的に標準法を実施し
 ようとしたが当学校では一コマ
 ごとに切りを付けるのでうまく
 合わなかったようだ。次に、液
 体クロマトグラフィー(HPLC)
 は購入後一年以上経つが全然
 使っていないかった。

これを稼働させ、ビタミン分
 析ができるようにした。しか
 し、この技術を伝授した人は化
 学知識が乏しく、ボタン操作の
 順番を覚えていただけ。

しかし通訳のフサン氏は事務
 員だが、英語力あり、化学を修

め全てを理解することが出来た。彼に分析の意味と機械の保全も教えたので安心して帰国した。



HPLCを指導中

二年間で一応の技術移転をしたが、その後改善状態を維持できるかどうか大いに心配がある。私は年齢七十一歳となりJICAにはもう応募できない、そこで個人としてシリアに今年の四月から行く積りであったが、民主化の波が荒く、治まるのを待っている。

その動きの中で、重大な問題が起こった。①技術移転の柱としたフサン氏から「シリアに民主化は必要です、私はデモに行きますが私が死んでも気にしないで下さい」とメールが来た。②日本シリア友好協会の事務局長はデモ隊に対して政府の対応を説明し沈黙を話している際に襲われ大怪我をした。

私はこの人に大いに世話になった。フサン氏が生きているかどうか不明である。フサン氏が死亡してしまうと、担当者だ

けでは分析作業で問題が起こった時、対応する能力がない。機械は飾り物になってしまいうらう。

民主化を求めるデモは今純粋な気持ちの人達が武器無しで行っているが、治安部隊は無差別発砲をしている。政府は危険と睨んだ人達を拘束しており、有能な人達から拘束、危害を加えられている。既に八千人以上が殺され、八ヶ月以上経った今も継続している。

総括すれば、①学校の授業とは一コマ内の終わる作業がメインとなる。食品分析は八時間労働に適った方法が主である。そのギャップが埋められなかった。②優秀な人がいたが、国営組織では縁故が優先するらしく、無能な人が担当となった。そこで優秀な人にも伝授し、実質的進歩とした。③政治的動揺が起きた今、私が伝えた技術も消えてしまう可能性が高い。

ベトナム北から南

田中 忠昭氏 ベトナム
農産加工品販売促進 船橋市



ハノイ農業大学食品科学部で学部生に対して食品微生物学の実験指導及び大学院生の修士論文用の実験の指導を行った。大学の教官は日本のシステムと異なりプロフェッサーと称する人は全学で僅かに六人しかおらず、食品科学部の

導を行った。大学の教官は日本のシステムと異なりプロフェッサーと称する人は全学で僅かに六人しかおらず、食品科学部の

学部長も准教授であった。教官の約半数は博士号を有し、主としてフランス、ベルギー、オーストラリアで取得していた。

従って、フランス語又は英語が堪能であった。大学の教育内容は日本のレベルとほぼ同等と思われた。女子の比率は約六十割で日本の農業大学に比べ女子の比率は高かった。授業は早朝六時半から夜九時まで行われており働きながら学ぶ学生にも配慮されている。卒業後、多くは食品関係の企業に就職する。



ハノイ農業大学での実験指導

日常生活については、ハノイでの住居はサービスアパートであり日曜を除く毎日部屋の掃除をしてくれる。シーツや枕カバーは週二回取り替えて市場があり新鮮な野菜、果物、肉、魚を買うことができた。物価は日本の五分の程度で生活はしやすかった。ただしインフレ率が高くなる一五割くらい上がっている。日本食レストランは沢山あるので困ることはなかった。空

気は極めて悪く夏場はモーターバイクの排気ガスによる光化学スモッグで目がチカチカした。現地の人は皆大きなマスクを着けてバイクに乗っている

ハノイは特に太陽が出るのが少なく毎日鬱陶しい天気であった。気温は夏は約四十度まで上がり冬は十五度まで下がるので南国にしては厳しい。交通インフラについては二〇一一年遷都千年で道路に信号がつけられたり歩道橋ができた随分良くなった。あとはルールをど

れだけ守るにかかっている。観光は、ハノイ近郊では世界遺産のハロン湾が有名であるがカットバ島まで行かなければ水は汚いしがっかりすると思う。

北部にはサパ、バックハー等少数民族が暮らす村があり空気もきれいで素朴な生活を垣間見ることが出来る。また、ベトナム最高峰三千以上の山がありガイド付きのツアーもある。中部には王朝があったフエ、日本人町があったホイアンは町並みや庭園、宮廷料理などを楽しめる。



北部サパ村のモン族

ダナンはベトナム第三の都市で近郊のリゾートを含め発展が著しい。南部ではニャチャン、ムイネー、ブンタオの海浜リゾートが有名であるが規模からいってニャチャンがおすすめ。メコンデルタのポートツアーも面白い。ホーチミンシティはハノイと違って年中暑い。人々も開放的である。経済的にも発展しており日本のコンビニ等はまずホーチミンに本店を出す。海外へのアクセスも良くホーチミンが住みよいと思う。ベトナムは日本から直行便もあり気軽に安心して旅行できるところなので是非一度行ってみることをお勧めする。

会員 便り

地域ボランティア活動

それは「ボケ防止」

津田 正臣
(当会事務局長)

私の世代の多くの人たちは、部下や女子事務員に書類を作成させ、自分で作成することなく育ってまいりました。

しかし、JICAシニア海外ボランティアとして海外に派遣されると、計画書の作成、三カ月ごとの現地事務所への報告書、職場での発表会など、すべての書類は自分の手で作成しなければいけません。

おかげでワード、エクセル、パワーポイントでの各種の編集・装飾や、ビデオの編集など

もできるようになりました。帰国後の地域社会への還元活動としては、習熟してきた外国語を生かし、地域ボランティアをする方が多いようですが、私の場合には、このような事務処理能力が、地域ボランティア活動の源泉となっているようです。現在、老人会「若葉の杜シニア会」、千葉市「雑紙分別推進委員会」、「若葉区福祉計画推進協議会」、「テレビ共同受信管理組合」等で、ボランティア活動を行っております。



老人会の立ち上げ総会

それらの発端は帰国後、地元の自治会長を引き受けた時から始まりました。数年間発行されていなかった自治会ニュースを発行、自治会活動の可視化や、初めての敬老記念行事も開催いたしました。地元の民生委員から老人会を立ち上げてくれないかとの要請を受け、立ち上げました。老人会は六十歳以上の人がほとんどのため、なかなか役員になつてくれる人がなく、すべての事務

処理は私がやるからと言って、会長を始めとする役員、班長をお願いし引き受けてもらいました。自分は総務・広報を担当し、シニア会の活動のほとんどの取り仕切りと事務処理を行っています。

市や区の事業にかかわるボランティアとしては千葉市の焼却ごみの削減、区の福祉計画の推進に関するもので、いずれも市民ボランティアの委員達がわかり易い、簡便な小冊子やチラシを作成し、市民ボランティア自らが、町内会、自治会、公民館、コミュニティセンターなどを回り、市民の末端まで啓発すべくプレゼンテーションを行うものであります。千葉市の「市政だより」に私のこの活動の一部が掲載されたのは大変嬉しく思いました。



「雑紙の分別について」の公民館でのプレゼン

このようなボランティア活動での資料作りや、多くの人との接触を通じることにより、自分のボケ防止に大いに役立っているものと感謝しています。さらには、シニア会では後期高齢を過ぎたお年寄り達が月一回の定例会に出席するのを楽しみにし、また各種のサークル活動に

興じている姿を見ると、苦勞が吹き飛ぶ思いの日々であります。



自治会役員の慰労会

在住タイ人児童・生徒のための日本語学習コミュニティ

上田 義晴
(当会前事務局長)

日本語や生活習慣の違いで悩んでいる千葉市とその近郊の在住タイ人への支援活動の一環です。標記プロジェクトを立ち上げ、千葉市国際交流協会の助成事業の認可を得て毎週土曜日午後一時半～三時半まで二時間、千葉市国際交流プラザの会議室で講座を主催してから早くも今年度から四年目になります。

きっかけは、私の人生の中で、海外駐在経験が長く（現役商社時代に六年弱、JICAタイ事務所、三年強）大変お世話になったタイとタイ人への感謝やご恩返しのが持端と根底にあります。同じ思いを持ちネットワークを立ち上げられた

山浦理事長（現千葉市稲毛区選出の市会議員）からのお誘いもあって、微力ながら当該プロジェクトを担当しています。

千葉市国際交流プラザでの日本語教室
(中央が筆者)

千葉市には、登録済みタイ人だけで、五五〇人強のタイ人が居住していることに着眼、日本語や生活習慣で悩んでいる在住タイ人への一助になればとの思いからスタートしましたが、諸般の事情から、生徒数は安定せず、受講生もなかなか思うようには増えず、悩む時期もありましたが成人も受け入れるようにしてから漸くタイ人同士のコミュニティ作りも出来る見通しが出てきました。

私共は、日本語指導のプロでなく、あくまで困っているタイ人のお手伝いをしているボランティア団体ですが、私共のクラスで知り合いになったタイ人同士が、仲良く連絡を取り合いながら、日本での生活をエンジョイし良い思い出を持ち帰って貰えれば何よりの喜びと考えています。

当会では、生徒の年齢、日本

語のレベル、勉強意欲等マチマチですから、特に使用教材は決めておらず、生徒各人が教えて貰いたい教材を自ら持参願ひ、それを基に、授業し相談に乗る形を取っています。

スピーチ大会出場の
日本語教室生徒

本稿を読まれた各位の中で、当該プロジェクトの趣旨をご理解頂き、新生徒の紹介その他何らかのご支援、情報提供等（あくまでボランティアベースで）ご協力賜ることが出来れば幸甚に存じます。ご質問、お問い合わせ事項等ございましたら、ご遠慮なくお申し越し下さい。

カンボジア郷愁旅行

「変化と不変」

北垣 勝之
(二〇〇三～二〇〇五 派遣)

かつての任地を再訪したくなったのは、最近カンボジアが変わってきたという報道に突き動かされたからである。何が変ったのか自分の目で確かめたいと思った。昨年二月九日から十三日間の「ぶらり一人旅」である。



エミン先生（右）と筆者

われら時々五S 根付くや訓練所

さつそく、モト（バイク）の後部座席に跨って二年間通った職

興味と期待に胸膨らむ。まずは二年間通ったバツタンパンの定宿に足が向く。
人と人相変われど知己不変
テオホテルのフロントでは見覚えのある顔が私を見てほろほ。いきなり懐かしい人々の消息を報告してくれる。オーナーも元気で何日でも滞在してくれと言う。宿代は要らないとまで言ってくれる。
年季橋架け替えられて情緒消え
街中を南北に流れるサンカー川、乾季のわずかな水量でも子どもたちの水遊び、岸辺の椰子の樹は昔のまま。だが人とバイクしか通れなかった築百年の渡橋は立派なコンクリート橋に変身、それに続く土埃の道路も舗装に変わった。近くには数棟、建築中の鉄筋ビル、聞けばホテルだとか。かつて刑務所だった所には現代的なショッピングモールが完成間近、ポルポトが見たらビックリするだろう。

年季橋架け替えられて情緒消え

その片鱗を所々に見付けて安堵する。国道六号線に面して営業する自動車修理工場も繁盛しているようだ。財政基盤の改善も順調とお見受けする。
故郷にしばし寛ぐ人の情



サンカー川（バツタンパン）

故郷にしばし寛ぐ人の情

業訓練所へ向かう。出迎えるミエン先生（電気科）の案内で所内を回る。鬱蒼としていた樹木の間伐、幾分明るくなった感じだ。但し大時計は以前と同じ止まったままの飾り物、外観はほとんど変わっていない。しかしダバンディ所長は、かつて私たちSVが導入した「五S運動」をその後も着実に進めていると言う。

業訓練所へ向かう。出迎えるミエン先生（電気科）の案内で所内を回る。鬱蒼としていた樹木の間伐、幾分明るくなった感じだ。但し大時計は以前と同じ止まったままの飾り物、外観はほとんど変わっていない。しかしダバンディ所長は、かつて私たちSVが導入した「五S運動」をその後も着実に進めていると言う。

バツタンパンは私にとって第二の故郷と言ってもよい。仏教に導かれた風俗習慣、ゆったりとした生活感覚は居心地がよい。そのような土壌の中で培われた人間関係は濃いものがある。訓練所長のもてなしで一夜カンボジア料理に浸る。久し振りに蒸したナマズやタガメを食す酒池肉林、教職員との打ち解けた会話を楽しむ。
教職を離れた先生の中には事

途上国三月見ぬ間に街変わる

業家や絵描きになった人もいる。訓練所は先生たちにとって人間陶治の場である。

現地では三ヶ月毎に街は変わると云う。ましてや六年間も離れていたら元のエイリアン（alien）に戻ってしまう。首都プノンペンはその最たるもの、街中には高層ビルが建ちクレーンの姿を見かける。二〇〇九年に三十二階建ての加華銀行ビルが竣工し新しいランドマークとなった。‘Canadian Bank’、と云うが中国系の資本である。

ここ数年外資の参加が増え、それが経済テイクオフを加速させた。
インフラの面では道路整備の外、トンレサップ川に韓国や中国援助の新しい橋が二つも架けられ、日カ友好のシンボルだった日本橋の地位がゆらぐ。セントラルマーケットも改装され都市は大きく変貌する。しかしカンボジアよ、いつまでも人情と水理と自然を忘れぬ国であってほしいと思う。



セントラルマーケットと加華銀行（プノンペン）

現地会員便り

中米ベリーズより

濱崎 丘 ベリーズ

平成二十三年九月から二年間、中米ベリーズの政府機関の一部局である「廃棄物管理機構」に赴任し、固形廃棄物処理の指導に当たります。十二月現在赴任して三カ月になりましたのでベリーズの国、暮らし等を中心に紹介します。

ベリーズってどこ？

ベリーズは中米のユカタン半島の付け根である国で、北はメキシコ、西はグアテマラと接し、東はカリブ海に面しています。面積は四国の約一・二倍、人口は全体で約三十三万人であり、柏市よりも人口が少ない国です。国土の大半は熱帯雨林の原生林であり、カリブ海側は世界第二位のサンゴ礁に面しています。



正直

中でのどこなのか全く分かりませんでした。またカリブ海、メキ



カリブ海と棧橋

シコ湾、大西洋の名前は分かっていますでしたが、これらの位置関係もはつきりわかりませんでした。ぜひ地図を開いてみて下さい。

「職場は何をする所？」
配属先は環境保全を総轄する天然資源・環境省の下部組織である廃棄物管理機構です。文字通り、環境関係でも廃棄物処理に特化した部局です。
この国には衛生的で管理された処理施設がなく、分別やリサイクルも充分でないため大きな社会問題になっています。
このため、米州開発銀行の支援で、廃棄物管理プロジェクトが二〇一〇年から始まり、二〇一二年の一月からは中間処理場、最終処理場の設計、施工に入る段階になっています。このプロジェクトはベリーズ国を東西に横断するハイウェイ沿いの一連の地域を新技術で先駆的に試行し、残り地域は既存のやり方を改善しながら進めるもので、配属先はその実施・総轄機関です。

「どんな仕事を？」

この国では廃棄物の収集、運搬、処分は自治体の責任で実施することになっています。配属先は政府機関として廃棄物処理の全体計画、モニタリング、技術支援等を自治体に指導する立場にあります。したがって役割分担が異なる二つの部署が夫々の立場で解を求めていくための技術的アドバイザリーとしての支援が期待されています。この支援に向けてまず既存資料の調査、処分場の現場調査、自治体関係者との打合せ等実態把握に取り掛かりました。

「どんな人達？」

ベリーズはマヤ系、アフリカ系、ヨーロッパ系、アジア系が入り混じった人種のルツボです。また公用語が英語である中南米唯一の国であり、彼等も誇りに思っています。現実には多くの知識人は英語以外にもスペイン語を習得して、近隣諸国の会議でもスペイン語に不自由しないようにしています。日常流れるTV、ラジオや多くの輸入品をみても、遠くの旧宗主国の英国より、近くのアメリカやスペイン語圏の影響が大きいと思えます。七十年代のアメリカのカントリ&ウェスタンの音楽を時々耳にした時はびっくりしました。とは言えレゲエ音楽、カリビアンRUM等独自のカルチャー文化がしっかりと根付いており、その点ではアメリカ文化もスペイン文化も人種同様、彼らの中で融合し彼等の文化となっているように思えます。いつも

柔和な顔つきで笑顔が絶えず人懐っこいベリーズの人々ですが、プライドも高く、その点は尊重して行動しなければならぬと思っています。

べを耳にしながらかけて歩きます。各地への移動はもっぱらバスが中心です。庶民の足となり、ベリーズドルで四ドル（二US\$に相当）も出せば国で一番賑やかなベリーズ市へ行けます。ここは首都であるため政府関係者が多いせいか物価は思った以上に高いです。

「どこに住んでいるの？」

私はベリーズの首都であるベルモパンに住んでいます。一九六一年十月、カリブ海で発生したハリケーンは当時首都であったベリーズ市を襲い、街は壊滅状態になり二百七十五名が犠牲となりました。そのため政府はベリーズ市から約八十キロ離れた内陸のベルモパンに首都を移転しました。

現在人口約二万人の小都市になっていますが、街のあちこちには馬、ニワトリ、ヤギが草などを食んでいる姿を目にするとても牧歌的な首都です。毎週火曜日と金曜日はデント張りのオープンマーケットが開かれ、近隣の農家から新鮮な野菜や果物や乳製品等がどっさり店頭に並びます。休みともなるとあちこちの家からボリュウム一杯のレゲエ音楽が鳴り響き、音の調

「どんな暮らしをしているの？」

私はベルモパンでアパート暮らしをしています。朝五時頃起床し、五時半位から、リングロードと呼ばれる約六歳の周回コースを速歩で一時間かけて散歩します。朝食後はアパートから職場へ十分ぐらいかけて通勤しています。朝の八時から夕方五時までみっちり勤務時間です。途中一時間の昼食時間があります。この昼食もアパートで取っていますので職場とは毎日二往復四十分の徒歩タイムで、計一時間四十分は平日の運動タイムです。驚いたことには職場仲間がびっちり八時間仕事に励んでいます。途上国の人は理由を付けては休むのではと先入観がありましたが、ここではそうでもありません。やはり首都でかつ政府機関だからでしょうか。

ただBGMはラジオがかかっています。時折レゲエ音楽が流れてきます。夕飯も自炊で、ラジオの音楽を聴きながらの夕食となります。午後九時ともなると就寝の時間で、日本の現役時代では考えられないような生活を送っています。

「どんな暮らしをしているの？」

私はベルモパンでアパート暮らしをしています。朝五時頃起床し、五時半位から、リングロードと呼ばれる約六歳の周回コースを速歩で一時間かけて散歩します。朝食後はアパートから職場へ十分ぐらいかけて通勤しています。朝の八時から夕方五時までみっちり勤務時間です。途中一時間の昼食時間があります。この昼食もアパートで取っていますので職場とは毎日二往復四十分の徒歩タイムで、計一時間四十分は平日の運動タイムです。驚いたことには職場仲間がびっちり八時間仕事に励んでいます。途上国の人は理由を付けては休むのではと先入観がありましたが、ここではそうでもありません。やはり首都でかつ政府機関だからでしょうか。



職場の仲間達との昼食会

JICA関連ニュース

二十三年度秋募集説明会報告

千葉県のJICAシニア海外ボランティア二十三年度秋募集「体験談&説明会」が柏市と船橋市で開催されました。

○十月三日（月）午後、アミューゼ柏でJICA協力隊事務局アジア大洋州課長、千葉デスクの出席のもとに行われました。

来場者は四十二名で前回は少し上回り、映画上映、制度説明の後、パネルトークを含む体験談&説明会が行われました。

当会からパネリストとして佐藤聡、加藤哲男両会員が、よろず相談員として須郷 隆雄会員、立会いに羽田 亨 会員が参加しました。

佐藤、加藤両会員は生き生きとした体験報告を行い、来場者から活発な質疑を受けました。

約六十名が来場され、勝又課長の挨拶に続き、シニア海外ボランティア活動の動画映写、シニア海外ボランティア制度と応募手続方法の詳細説明がありました。

パネルトークは原 浩治 主任の司会で、応募の動機、派遣前訓練、現地での任務、生活事情、夫の随伴、等について 弓貞子会員が応答する形式で進められました。弓 会員は、シニア海外ボランティア経験は自己形成に大きなプラスになり、現在の自分に充実感として残っている。来場者に応募について是非前向きな検討を望むと呼び掛けました。

パネルトークは原 浩治 主任の司会で、応募の動機、派遣前訓練、現地での任務、生活事情、夫の随伴、等について 弓貞子会員が応答する形式で進められました。弓 会員は、シニア海外ボランティア経験は自己形成に大きなプラスになり、現在の自分に充実感として残っている。来場者に応募について是非前向きな検討を望むと呼び掛けました。

パネルトークは原 浩治 主任の司会で、応募の動機、派遣前訓練、現地での任務、生活事情、夫の随伴、等について 弓貞子会員が応答する形式で進められました。弓 会員は、シニア海外ボランティア経験は自己形成に大きなプラスになり、現在の自分に充実感として残っている。来場者に応募について是非前向きな検討を望むと呼び掛けました。



体験談説明会のパネルトーク

JICA青年海外協力隊事務局計画課 勝又 晋 課長、青年海外協力隊事業一課 原 浩治 主任、増田 学、古野順平、楠田知子各氏、千葉デスク 田村由美子氏の出席のもとに行われました。



楠田氏（左、司会）と挨拶中の勝又課長

当会からパネリストとして 弓 貞子会員、よろず相談員には坂出直哉会員が参加しました。立会いは品川洋之助会員でした。

約六十名が来場され、勝又課長の挨拶に続き、シニア海外ボランティア活動の動画映写、シニア海外ボランティア制度と応募手続方法の詳細説明がありました。

パネルトークは原 浩治 主任の司会で、応募の動機、派遣前訓練、現地での任務、生活事情、夫の随伴、等について 弓貞子会員が応答する形式で進められました。弓 会員は、シニア海外ボランティア経験は自己形成に大きなプラスになり、現在の自分に充実感として残っている。来場者に応募について是非前向きな検討を望むと呼び掛けました。

新SV千葉県庁表敬訪問

九月十四日（水）午後、JICA地球ひろばNPO支援隊内藤課長の引率で、平成二十三年度第二次隊の青年海外協力隊員（JOCV）十六名およびシニア海外ボランティア（SV）熊井憲治、濱崎丘（当会会員の二名の方々）が千葉県庁を表敬訪問し、千葉県総合企画部高橋渡部長の激励を受けられました。



JOCVとSVに囲まれる高橋部長



第2次隊SVの濱崎氏(左)と熊井氏

当会からは後藤副会長が同席しました。

十二月十三日（火）午後には、JICA地球ひろば地域連携課の長谷川敏久課長の引率で三次隊八名およびシニア海外ボランティア小松秀世（当会会員）、後藤和徳、野崎昌宏、古川惇一の四名の方々千葉県総合企画部 高橋渡部長の激励を受けました。

当会からの同席者は山本会長でした。



小松氏の出発挨拶

第五回協力隊祭り開催のお知らせ

（社）青年海外協力協会主催の第五回協力隊まつりが四月二十一日（土）～二十二日（日）に渋谷区広尾のJICA地球ひろばにおいて開催されます。地球ひろば移転のため、広尾での最後の協力隊まつりですので、皆様是非ご来場ください。当会もブース出展いたしますので、皆様のご参加をお待ちしています。

平成二十四年度春募集説明会のお知らせ

JICAシニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の春募集説明会が左記の通り開催されます。会場ではパネリストによる体験談発表や、よろず相談があります。

■ 四月五日（木曜日）
柏会場（アミューゼ柏）
（柏駅徒歩七分）

・シニア海外ボランティア
十五時三十分～十七時三十分
・青年海外協力隊
十九時～二十一時

■ 四月二十四日（火曜日）
船橋会場（きららホール）
フェイスビル六階

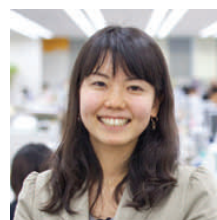
・シニア海外ボランティア
十五時三十分～十七時三十分
・青年海外協力隊
十九時～二十一時

■ 四月十五日（日曜日）
幕張会場（幕張メッセ国際会議場三階）
（海浜幕張駅徒歩五分）

・青年海外協力隊
十四時～十六時

四月十五日 幕張会場は「青年海外協力隊」のみです。各説明会への参加は予約は必要ありませんので、会場に直接お越しください。JICAボランティアに関心のある皆様をお待ちしております。

地球ひろば便り



JICA地球ひろば（広尾センター）地域連携課兼市民参加協力促進課の渋谷明日香と申します。

昨年（二〇一一年）の五月に地球ひろばに異動してまいりました。現在、ボランティア事業を含め、市民参加事業を担当させて頂いておられます。

前部署では中東支援を担当し、イエメン、エジプト、チュニジアといった中東諸国を何度も出張で訪れました。残念ながら治安の悪化により、イエメンからはボランティアが引き上げてしまいましたが、エジプト、チュニジアでは「アラブの春」による避難一時帰国を経ながらも、現在もボランティアが活躍しています。

新人時代にエジプトで約四カ月の研修を行った際には、オアシスの小さな村に配属されていた青年海外協力隊員の活動に同行させて頂きました。私がJICA職員だと自己紹介をすると、村の人たちから「（任期満了が目前に迫った）彼女（隊員）を帰さないで、もっといられるようにして。」と言われたことが今でも非常に心に残っています。二日足らずの同行でしたが、彼女が村の人たちに信頼されていることがよくわかりました。

編集後記

素晴らしい活動を現地でして来られたボランティアOB・OGの方々に、その経験を日本で伝えていただくべく、地球ひろばではこれからもOB会の活動をサポートして参ります。どうぞよろしく願います。

光陰矢の如し、一年はあっという間に過ぎる。この一年を喩う言え「覆水盆に還らず」。震災前震災後、福島前福島後の社会や人々の心の在り様の変化には著しいものがある。

しかし、こうした前後の変わり様と比べて、私達、海外ボランティア経験者は、どれほど途上国に対する謙虚さの重要性を再認識することになったか、どれほど自身の尊大さに気付くことになったか、どれほど彼らに優しく接する気持ちが取り戻せたかなどと反省することは多い。

一年前の災害が、私達の心構えをあらためて試す機会になったことに注目すべきだ。

（大西輝明）

ご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)
043-255-3810 (山本)
Shigeho_yamamoto
@yahoo.co.jp

千葉デスク国際協力推進員
043-297-0245 (田村)
jicadpd-desk-chibaken
@jica.go.jp